

第5回

# 私のウィーン時代

日壊協会理事  
杉本 純



今回は日本原子力研究開発機構のウィーン事務所長として現地で勤務された元京都大学教授の杉本純さんに寄稿してもらいました。

日本原子力研究開発機構（原子力機構）は、中東欧、ロシアにおける原子力研究開発情報の収集・分析、国際原子力機関（IAEA）および日本政府代表部との調整・協力強化等のため、1989年よりウィーン事務所を設置している。筆者は、2004～2007年までの3年間、ウィーン事務所長として赴任した。ウィーン国際センター近くのウィーン最高層のビル、ミシエック・タワー最上階の34階に居室がある。日本人職員2名と現地秘書1名の計3名で構成される。

原子力研究開発情報では「ウィーン通信」というメールニュースをほぼ毎日、社内に発信した。月報では、趣味も兼ねて描いた水彩風景画を冒頭に掲載してウィーンの雰囲気も伝えた。今やインターネットにより、どこからでも情報が得られる時代であるが、自ら会合に参加したり、会合参加者から得られる生の情報など、独自の情報収集と情報の分析に重点を置いた。

ウィーンの原子力といえば何といても、IAEAの存在が最も重要である。IAEAは例年9月に総会を開催しており、世界から約2千名の参加がある。2006年の第50回記念総会には、松田岩夫科学技術担当大臣を始め27名の派遣団が参加した。記念総会に合わせて、初めて原子力機構のブース展示を行った。ブースには大臣も立ち寄り下さったが、その後、上品なご婦人がお連れとSP2名を伴って現れた。説明後「失礼ですが名刺を頂けますでしょうか」と伺ったところ「名刺は持っていませんの、ただ、主人はエネルギー省長官のボドマンです。」といわれ驚いた。その後ブース展示は毎年実施し、最近では原子力産業協会や日立、三菱、東芝等とも共同で「日本ブース展」として実施している。

2005年10月に東京で開催された原子力機構統合記念式典では、主要国や国際機関にビデオメッセージを依頼することになった。そこでエルバラダイIAEA事務局長に広報を通じてお願いしたが、一向に埒があかず困っていた。日本大使主催のパーティーに出席したら、ご本人が出席していたので、筆者から直接突撃依頼して快諾を得た。10月3日にビデオを入手した直後の7日に、氏とIAEAのノーベル平和賞受賞発表がありその後は超多忙で無理だったろうから、間髪なかった。式典で外国からのメッセージの冒頭に同事務局長が写し出されると、満員の会場にどよめきが起きたと後から聞いた。

2006年10月には調査の一環として、ウクライナにある事故後20年のチェルノブイリ原子力発電所を訪問した。4号機を覆う巨大な石棺を展示建物の窓ガラス越しに見て、これが世界を震撼せしめたあのチェルノブイリかと、しばし感じ入ったのを覚えている。

政府、大学、産業界からの出張者の対応も重要であり、必要な情報の提供や意見交換の場の設定などもある。その分野のトップクラスの要人も話げできたことは貴重な財産である。地元日本プレス8社への原子力機構設立説明会、ウィーン大学日本語科学生への我が国の原子力状況説明会など、地元への地道な広報活動も重要である。また、様々な媒体への寄稿を通じて、原子力機構の活動や原子力を知ってもらうきっかけを作れたと思う。例えば、オーストリア日本人会会報へは、「原研ウィーン事務所」や「チェルノブイリ訪問記」などの記事を掲載して頂いた。地元の情報誌「月刊ウィーン」には、「ウィーンと原子力」などの記事を掲載して頂いた（現在も「原子力の話」と題するエッセイを連載中。<http://www.wattandedison.com/Sugimoto.html>）

ウィーンに住む日本人の間では、大使館、IAEA、日本人学校、日系企業、日本食レストランなど約12チームで競うソフトボール大会が最大のイベント。日曜朝からのトーナメントでは応援する家族や友人、日本人学校生徒も加わり300名近くがプラター公園の一角に集まり、昼食時は芝生の上で弁当を広げたり、鍋でカレーを温めたりの大賑わい。私が所属していたGOT（グレートおじさんチーム）は、名誉4番の私も含めてクリーンアップ全員が50代だったが、2005年に奇跡の優勝を遂げた。2006年には国際ソフトボール大会が始まり、筆者が監督となって「チームジャパン」を結成した。リーグ戦では8チーム中5位だったが、決勝トーナメントでは中南米、米国など並み居る強豪チームを倒して見事初代チャンピオンに輝き、監督が宙に3度舞う感激の胸上げとなったことも忘れがたい。



国際ソフトボール大会優勝 2006年6月